

キリシタン文献・ローマ字本の ウ段長音表記変遷について

千葉 軒 士

キーワード：キリシタン文献 ローマ字本 ウ段長音 印刷 版面担当者

1. はじめに

本稿は、キリシタン文献・ローマ字本におけるウ段長音表記の変遷を捉え直し、その変遷の要因として印刷の影響について検討するものである。千葉（2009）は、キリシタン文献・ローマ字本におけるウ段長音の表記について、「ウ段長音にはオ段長音の開合のような対立が見られないために、[^]を付すことでも長音を明示するマークになったととらえることができる」と結論づけた。しかし、この考察はキリシタン文献の文学作品を中心に考察したもので、『日葡辞書』などを含めたキリシタン文献全体像を十全に踏まえたものではない。また当時の印刷状況についても精査をしたものでもない。本稿では、『日葡辞書』、写本類におけるウ段長音についても触れ、ウ段長音表記変遷について再検討を行う。

2. キリシタン文献・ローマ字本のウ段長音表記の変遷

2.1 キリシタン版での表記

キリシタン文献・ローマ字本でウ段長音に対応する箇所には、主にアセント符号[˘]が使用されるが、『サントスのご作業』『ヒイデスの導師』『日葡辞書』『サカラメント提要』『スピリツアル修行』の5冊では、[^]も用いられる。また、『日葡辞書』では、[˘]も用いられる。以下の表1に、キリシタン・ローマ字文献におけるウ段長音の使用数を示す。

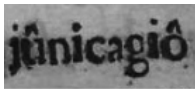
この5冊の内、『サントスのご作業』『ヒイデスの導師』については前掲した千葉（2009）が、タイトルなどのポイントの大きい活字での使用が見られ、このポイントの[˘]がなかったために^ˆを利用した可能性を指摘するが、その2つを除いた3

表 1 キリシタン・ローマ字文献版本における ù・û・ù の使用総数^(註1)

	ù	û	ù
サントスのご作業 (1591)	1418	8	0
ドチリナキリシタン (1592)	184	0	0
ヒイデスの導師 (1592)	1343	3	0
天草版平家物語 (1592)	1556	0	0
イソポ物語 (1593)	474	0	0
金句集 (1593)	26	0	0
コンテムツスムンヂ (1596)	680	0	0
ドチリナキリシタン (1600)	92	0	0
日葡辞書 (1603-1604)	1865	145	349
サカラメンタ提要 (1605)	89	19	0
スピリツアル修行 (1607)	1195	55	0

つの文献、すなわち『日葡辞書』『サカラメンタ提要』『スピリツアル修行』については本文と同一のポイントの ù, û が利用されており、明確な併用理由を示せていない。この3つの文献は、豊島 (2013) で指摘のある新たに日本で活字を作り始めた後期キリシタン版 (1594年以降1611年まで) の作品にあたる。この3つの後期キリシタン版の作品でウ段長音表記が併用されるということは、中野 (2020) で指摘される『日葡辞書』での新たな活字の作成といった新規活字の鑄造といった点などと関わりうるかもしれない。本稿では、この印刷という点に注目し、ウ段長音表記変遷を捉え直す。

ただ、印刷開始当初から ù の本文用ポイント (約10ポイント) 活字が全くなかったというわけではない。先述したように、前期キリシタン版 (印刷開始当初から1593年) の『ヒイデスの導師』(1592) には以下のように ù の例があり、日本に持ち込まれた欧州製の活字内にこの活字がなかったというわけではない。^(註2)



jûnicagiô (十二か条) 『ヒイデスの導師』253-9

2.2 写本での表記

日本での活字印刷が始まる前段階の日本語ローマ字の書写状況を示しうる写本資

料「バレット写本」(1591)では、書写者マヌエル・バレット司祭と、写本中の132r-155vの箇所を書写した別筆者が共に、ウ段長音対応箇所^(注3)に ü と ú を利用する。ただ、û は一切用いられておらず、版本誕生以前には、ウ段長音対応箇所^(注4)に ^ は用いないという考えが、基本的な理解であったといえる。写本では、ˇ・´ の2つのアセント符号が利用される。版本誕生前の写本書写段階では、ウ段長音対応箇所^(注4)に統一した符号を使用するという傾向は見られない。

2.3 『日本小文典』での表記

イエズス会司祭ジョアン・ロドリゲスは日本語の詳細な考察を行い、『日本大文典』(1604-1608、長崎刊)および『日本小文典』(1620)を記した。この2作のうち、『日本大文典』では ü を用いたが、マカオで刊行された『日本小文典』では û を用いている。ロドリゲスは『日本小文典』で、ウ段の長音の表記について以下のように記し、ウ段長音は û で付すことが望ましいと捉える。

長い û は u が二つあるのに似ており、ポルトガル語の Crû, Nû, Perû, Mèrû などのごとくなる。

(池上岑夫訳(1993)『ロドリゲス日本語小文典(上)』(岩波文庫) p.71)

この変更について森田(1977)は、以下のように記している。

これはローマ字の ü (または û ù) で写す。『日本大文典』によれば、唇を狭めて発音する合音に属し、オ段合長音(後述の ô)と区別して「引く ü, または、長むる ü」と呼ぶ。uu のように延ばして発音するもので、ポルトガル語 Perù(七面鳥)の発音と同じだという(六三〇頁)。ロドリゲスは、右の観点から『日本小文典』では統一して û に改めているが、この ü (û) は [u:] に当たると見られる。(p.273、本文縦書き)

森田も『日本大文典』と『日本小文典』での ü から û へのウ段長音の表記の変更は発音に即したものと捉えている。また、この変更がロドリゲスの詳細な日本語観察によるものとしても、それ以前に日本で刊行されていたキリシタン・ローマ字

文献にあてはめることはできない。キリシタン・ローマ字文献諸本においてウ段長音をどのように示すかという方針と1620年の時点でのロドリゲスの音韻論的解釈が同じものであったとは考えにくい。

このように、ウ段長音に対する長音表記は、キリシタン資料の作成される時代で異なる。この表記変化をまとめると以下ようになる。

表 2 ウ段長音に対応するアセント符号の変遷

	ウ段長音表記法
バレット写本 (1591)	ú ũ
前期キリシタン版 (1591-1593)	ũ
後期キリシタン版 (1594-1611)	ũ û ù
日本小文典 (1620)	û ù

ウ段長音の表記について、写本での揺れが、前期キリシタン版でほぼ1つになったものの、後期キリシタン版で改めて併用されるという、一見不可解ともとれる変更を行う。この変更要因を、新たな活字の鑄造の影響や、あるいは不足の活字を補ったのかなど、印刷の視点で捉えることが可能か、検討していく。

3. 前期キリシタン版での ũ の使用数

『日葡辞書』など、後期キリシタン版でのウ段長音表記の変更について考える前に、前期キリシタン版で行われた印刷で、どれほどの活字が必要であったかを捉える。『天草版平家物語』がOctavo印刷（八折）であることを踏まえ、折ごとに使用される活字数を数えた。例えば207丁から0折のオモテ、ウラ面では以下の表3・表4で示す活字が用いられる。^(注6)

この表から、そもそもアセント符号を付した文字は多用される活字でないことが分かる。アセント符号を付さない母音字が、アセント符号を付した活字よりも圧倒的に多用されており、あくまでもアセント符号を付した活字がオプション的な位置づけであることがわかる。

このような活字使用数調査を『天草版平家物語』のB折（15-30）から、Bb折（383-398）までで行った。^(注7) その結果、1つの折での ũ の平均利用数は60.8、ô は

表 3 O折オモテ面 (207, 210, 211, 214, 215, 218, 219, 222)

a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	m	n
999	79	325	144	529	108	147	67	696	52	253	475
o	p	q	r	ř	t	u	v	x	y	z	û
837	0	104	344	158	586	552	121	170	191	87	0
ũ	ö	ô	ã	ĩ	ũ	ē	õ	ÿ			
53	79	44	1	0	0	1	0	49			

表 4 O折ウラ面 (208, 209, 212, 213, 216, 217, 220, 221)

a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	m	n
946	80	324	140	567	97	140	38	692	45	259	447
o	p	q	r	ř	t	u	v	x	y	z	û
908	3	123	365	157	575	565	103	171	183	92	0
ũ	ö	ô	ã	ĩ	ũ	ē	õ	ç			
38	92	40	0	0	0	0	0	50			

102.4、öは196.8であり、アセント符号を含まないuの平均が1057.6、oの平均が1777.0であった。キリシタン版の印刷にあたり、アセント符号付きの文字は、付していない文字と同程度に用意する必要はなかったことがわかる。これを印刷に携わる側がわかっていたら、後期キリシタン版作成に向けて新たに活字を作成する際に、アセント符号付きの活字を多く作成する必要はなかったといえる。このアセント符号付きの活字の不足が、後期キリシタン版における併用を生じさせたのだろうか。

なお、『天草版平家物語』の印刷でÿをもっとも多用している折が、表3・表4で示したO折である。また、前期キリシタン版の作品でÿが最も多用されるのが『天草版平家物語』で、同じ前期作品の『サントスのご作業』では、1つの折のÿの平均利用数は16.9、ôが6.2、öが20.3である。これが前期キリシタン版のÿの利用状況である。^(注8)

4. 『日葡辞書』でのウ段長音使用実態

『日葡辞書』でのウ段長音表記について、森田(1993)は、『日葡辞書』内にあるウ段長音の使用数を部毎に示した上で、以下のように記した。

別・篇別	A	B	C	D	F	G	I	M	N	Q	R	S	T	V	X	Y	Z	
ũ	本篇	57	33	35	2	159	113	157	92	90	198	71	87	146	83	181	109	12
	補遺	7	0	32	3	9	11	13	6	12	22	17	6	9	13	41	39	0
û	本篇	1	22	16	2	14	1	7	2	4	0	2	2	1	0	6	0	0
	補遺	0	1	2	0	2	10	9	1	7	4	10	4	2	3	8	2	0
ù	本篇	11	5	276	13	33	5	3	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0
	補遺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

(p.168)

これによって、ũは本篇・補遺を通じて最も多く、これを用いるのを原則としたことが知られる。これに対して、û、ùは本篇のF部までに比較的多いが、それ以下には少ない。殊にùは偏在の傾向が強くて、G部以下にはまれにあるのみで、補遺に至っては全くないのである。(中略)これは本篇のC、D部あたりの編纂分担者が、ùを用いる方針をとったからであるが、それ以後これを改めてùを用いないこととなり、その結果補遺には用いられていないのである。それに代わってũの使用を本則とするに至ったのであろう。しかし、ũをもって完全に統一するには至らなかったのは、原稿写本にはなお、û、ùを含んでいたからであろうと考えられる。 (pp.168-169、下線筆者)

たしかに、『日葡辞書』のウ段長音表記は、部ごとで多用されるアセント符号が異なる。また、森田は“編纂分担者”の方針の影響を指摘する。しかし、豊島(2013)で指摘のあるように、原稿が印刷で必ずしも忠実に再現されるとは限らないという当時の印刷事情を踏まえると、アセント符号の併用が、原稿ではなく、印刷における版面担当者の関与も検討する必要がある。

そこで、文学作品がOctavo印刷であったのと異なり、『日葡辞書』がQuarto(四折)の印刷であることを踏まえ、この折ごとにウ段長音数を捉え直した。『日葡辞書』本篇のA折からo折までを調査対象とした。

『日葡辞書』本篇を構成する全83折中、1つのアセント符号のみをウ段長音と対応させるのは、38折(内、˘が36折、˙が2折)である。半数以上は複数のアセント符号を併用する。なお、ウ段長音がûのみで示される折はない。

また、ウ段長音対応箇所数の最大数を有するのはN折で147箇所(ùが126例、ũが

15例、ûが6例)である。^(註9)前期キリシタン版での活字が後期キリシタン版でそのまま使用されたかは定かではないが、前節で確認した前期キリシタン版における活字使用状況を、その時点でのアセント符号を含む活字の使用上限に近いと考えるならば、『日葡辞書』の長音表記に対応できない。^(註10)

次に、折ごとにおける ü, û, ù の活字の最大使用数は、ü が120 (Eee折 (この折では ü のみ))、û が10 (E折 (ウ段長音対応箇所21、その内 ù が9例、ü が2例))、ù は126 (N折 (ウ段長音対応箇所数147、その内 ü が15例、û が6例)) である。

この ù の最大使用数126をウ段長音対応箇所にあてられる使用可能活字の上限と仮定した時に、127以上のウ段長音箇所があるのはN折のみであり、この折のためにやむなく、他のアセント符号が付された活字を利用した可能性は否定できない。ただ、このN折はC部内の折で、このC部では『日葡辞書』中で最も多用される ü をあまり使用せずに ù を多用し、また不足に対応したとして ü, û の2種を用いており、やむを得ない代用という印象がない。そして、N折に後続するO折でも、ù が20例用いられるが、ü が13例、û が2例と併用させており、ù が不足したことで、他の活字を持ち込んだとは考えにくい。

なお、1つの折での ü の最大使用数120を使用可能活字の上限とするならば、121以上のウ段長音対応箇所があるのもN折のみで、活字の制約から考えれば、N折以外は ü, ù のみで印刷を行うことは可能とも言える。ここから、おそらく活字の不足によってアセント符号を併用したのではないだろう。ここにあるのは意図的な併用である。

ここで以下の表5にて各折でウ段長音にどのアセント符号が使用されるのかを示す。

表 5 折・部の視点で見えるウ段長音に使用するアセント符号

部	A				B				C							
折	A	B	C	D	E	F	G	H	I	K	L	M	N	O	P	
ア	^v			3				v^			^	^^	3		v	
部	C			D		F							G			
折	Q	R	S	T	V	X	Y	Z	Aa	Bb	Cc	Dd	Ee	Ff	Gg	
ア	v^			3				v^		3	v^		3			v^
部	G		I					M					N			
折	Hh	Ij	Kk	Ll	Mm	Nn	Oo	Pp	Qq	Rr	Ss	Tt	Vu	Xx	Yy	
ア	v	3	^^	v^	^^	3	^^	v	^^	v			^^	v		
部	N	P	Q				R		S				T			
折	Zz	Aaa	Bbb	Ccc	Ddd	Eee	Fff	Ggg	Hhh	Iii	Kkk	Lll	Mmm	Nnn	Ooo	
ア	^^	v					^^		v	^^		v				
部	T					V					X					
折	Ppp	Qqq	Rrr	Sss	Ttt	Vuu	Xxx	Yyy	Zzz	a	b	c	d	e	f	
ア	v	^^	v					v^			v					
部	X			Y				Z								
折	g	h	j	k	l	m	n	o								
ア	v		^^			v										

*表内、左列にある「ア」はアセント符号、「ア」行内にある「3」は3種併用を意味する。

森田の表にあるように、各部内で複数のアセント符号が併用され、また、その部内でも、折ごとで対応が分かれる。また、森田はC、D部あたりの編纂分担者がùを多用していると述べるが、さらにこの部を構成する折に注目すると、実際は異なる。

表 6 C部・D部の折ごとのウ段長音表記数

部	C										D			
折	G	H	I	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	
û	8	12	6	1	0	0	6	13	0	2	2	0	6	
ú	2	0	0	0	0	1	15	2	0	0	0	2	3	
ù	1	5	15	2	19	19	126	20	24	35	27	11	1	

C、D部でも、G、H折ではùを主として用いている。そして、I部からS部

までは ù を主として用い、T 折からまた ù を主として用いている。これは、部の編纂分担者の方針というものだけではなく、より細かい単位としての折ごとの版面担当者の影響もあるのだろう。ウ段長音の表記に複数のアセント符号が併用されるのは、部の編纂分担者と版面担当者の双方の影響により併用している可能性が高く、新たな活字を鋳造した影響や、不足の活字を補ったためということではない。

5. 版本における長音表記

どのように印刷するかを最後に判断する版面担当者が、なぜウ段長音の表記を併用させるという対応を許容したのか。それについては、やはり千葉（2009）が指摘するように、オ段長音に存在するような音韻的対立がウ段長音には存在しないという点に注目する必要がある。オ段長音には合長音と開長音という音韻的対立があるために、o の上に付す $\hat{\ } \text{と} \check{\ }$ の明確な使い分けは必須であり、異なる符号をマークすることは誤りを提示することにつながった。だが、ウ段長音ではこのような音韻的対立は見られない。このことが、u の上に何らかのマークを付すことは、視覚的に単なる u とは異なることを明示することにつながり、u に何らかのアセント符号を付すだけで長音表示となりえたといえる。この対応を後期キリシタン版の版面担当者は許容した。ここで注目すべきは、『日葡辞書』は先述した森田（1993）で指摘されるように、部ごとの編纂も確認できる点にある。おそらく、この編纂段階でこの C 部の編纂分担者は ù を付したものを多く用いていたのであろう。これは写本におけるウ段長音の表記で確認したように一つに定まっていなかったためである。^(註11) そのため、印刷する際に、大方はもとの原稿に沿い ù にしたものの、当時の印刷が原稿通りに文字化されないこと、そしてウ段長音に音韻的対立がないことを考慮に入れると、版面担当者はこの表記の揺れを許容した。ただ、L、P 折では ù のみを用いているが、これはこの折にそもそもウ段長音箇所が少なく、1つの符号で偶然収まっているものと思われる。使用数が増えれば表記の揺れが生じやすく、この2つの折は意図的に ù のみを用いようとしたわけではないものと考えられる。

このように版面担当者が何か意図を持ってウ段長音表記を混在させたのではないと考えるのも、版面担当者が多数存在していたわけではないためである。豊島（2010）で、イエズス会の天正遣欧少年節団に随従した日本人3名が日本の活字製造に大きく関与したものの、このうちの一人前期キリシタン版の活字作成に関

わったジョルジュ・デ・ロヨラはマカオで客死（1589年）したため日本での新たな活字製造には関わってはおらず、またもう一人のイチク・ミゲルも1605年1月に病没し、その影響で金属活字の仮名活字印刷を行わなくなったことを指摘する。もちろん、この豊島の指摘は金属活字の仮名印刷の話であり、ローマ字印刷にそのまま適用するわけではない。ただ、イチク・ミゲルが後期キリシタン版で始まるイタリアック体などの制作に関わった可能性は高く、そのミゲルの死がキリシタン版の新たな活字製造を止めたように、版面担当は誰にでも容易に出来るというわけではない。とすると『日葡辞書』に関与した版面担当者はそう多くなく、様々な版面担当者によってウ段長音表記の併用状態が作られたのではなく、原稿段階での表記の揺れとそれを許容する版面担当者の最終判断により、この併用状態になったと考えられる。

なお、この『日葡辞書』後の資料である、『サクラメント提要』、『スピリツアル修行』で、`が用いられていない点については『日葡辞書』刊行の翌年1604年に作成された『日葡辞書』の「補遺」で`が使われていないことを考慮に入れるべきだろう。本篇で許容した`を使わず、主にü、またûもまれに使うといった対応に妥容している。この点は、原稿の書き手と版面担当者の間で、ウ段長音には`を用いないという新たな判断が生じたといえる。

ここで、当時このアセント符号がどのように使い分けられていたのかを考えよう。丸山（1988）はロドリゲスの著作のポルトガル語文に見られるアセント表記の傾向を以下のように示す。

1. アセント符号は一般に、付しても付さなくてもよいものである。
2. ´、`、^、ˇ、の間にはっきりした使い分けは見られない。
3. ただし、同綴異語を区別する時には、アセント符号を利用する。

(p.73)

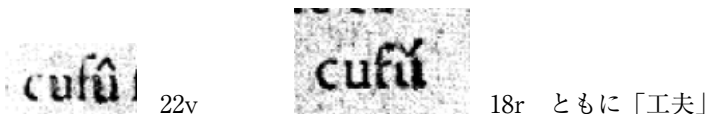
ここで2に記す「´、`、^、ˇ、の間にはっきりした使い分けは見られない」という指摘に注目する。もちろんこの指摘はポルトガル語文にあてはまるものであり、日本語ローマ字本にそのまま適用できるわけではない。しかし、この指摘は当時のポルトガル語表記において、アセント符号にはっきりとした使い分けがなかつ

たということを示す。アセント符号のこのような条件のもとで、日本語のウ段長音という音韻的対立のない箇所では、どのアセント符号をマークしても、長音を明示することにつながったのではないか。

ではなぜ、わざわざほぼ統一されていたと考えられる表記を、表記を統一しないという、いわばゆるい縛りへと変更したのだろうか。この点は推測に過ぎないが、時間の経過に伴い、宣教師達が日本語に対する理解を増すにつれ、ウ段長音には明確な対立がないため、何らかのマークをつけることで視覚的に単なる u とは異なることを示せばよいというポルトガル語と同等の対応をした。ただ、従来 ü を用いていたので、これを主に利用したが、何もこれである必要はなく、それがすでに所有している他のアセント符号を付した活字でも対応するという選択へとつながった。この解釈は、前期キリシタン版にもあてはまるところがあり、ウ段長音は主として [˘] で記すという方針ではあったものの例外的に ^ˆ を使うケースがあった。この例外を可能にしたのも、その背景にはウ段長音には音韻的対立がないという前提があった。その対立がないということがより広く具現化されたのが、後期キリシタン版で版面担当者が許容したアセント符号の併用でなかろうか。

6. 可読性向上のための制約

ここまで、ウ段長音の変遷を考察してきたが、わずかではあるがウ段長音表記で ^ˆ が使用されやすい環境がある。それは ^ˆ に前接する文字が縦長の際である。後期キリシタン版の『スピリツアル修行』の55例のうち、f が33例、i が6例、h が4例、『サカラメンタ提要』の19例のうち、f が4例、i が6例、h が1例、『日葡辞書』の145例のうち f が8例、i が20例、h が18例、使用される^(註12)。もちろん、これらの文字の後に ^ˆ が付される例も多々見られるが、^ˆ に前接する文字は縦長のものが多い。これは ^ˆ のアセント符号が前接する文字と重なることで誤読されないための対応である。『スピリツアル修行』の例を以下に示す。



ûのアセント符号はヤマ型であるため前接する文字 f の右上部で重ならないが、üのアセント符号は上に開いているため、前接する f の右上部と重なる部分がある。このゝのアセント符号の形状が、前文字が縦長（さらに f で言えば右上部）の際に重なりやすい。これは千葉（2008）で触れたキリシタン版で用いられる s の異体字「についてと同様で、本来、語頭・語中で用いられる「が、後続する文字にアセント符号が付されている際に重なって見えてしまうために、本来語末で使用する s が使用されやすくなるというケースがあることを示した。これと同様のことが、^でもいえる。ただし、これは必ずしも^にするというのではなく、あくまでも可読性の向上のために出てくる傾向といえる。ただ、これもまたウ段長音に音韻的対立がなく、何らかのアセント符号を自由に付すことが可能という環境下においてのみ、実現できるものといえる。これは折ごとの対応ではなく、植字の際に可読性を意識した印刷上の軽い制約といえる。必ずしもこの対応がされるわけではないが、ケースによって文字を鮮明に見やすくするために活字の変更を行う。こういった可読性の向上を目指した対応は編纂分担者ではなく、活字を組む版面担当者のみが担える対応といえる。音韻論的対立が存在しないことは、この符号を使わねばならないという縛りではなく、可読性を優先させるという対応を生じさせている部分もある。

7. まとめ

本稿では、以下の点を確認した。

- ・アセント符号を付した文字は多用される活字でない。アセント符号を付さない母音字が、アセント符号を付した活字よりも圧倒的に多用されており、あくまでもアセント符号を付した活字がオプション的な位置づけである。
- ・ウ段長音の表記に複数のアセント符号が併用されるのは、使用可能活字の上限という可能性はやや残るが、版面担当者の最終判断で併用を許容している可能性が高く、新たな活字を鑄造した影響や、不足の活字を補ったためということではない。
- ・版面担当者がこの対応をとったのは、そもそもウ段長音に音韻的対立がないことによる。このことが、u の上に何らかのマークを付すことは、視覚的に単なる u とは異なることを明示することにつながり、u に何らかのアセント符号を付すだ

けで長音表示となりえた。日本語に対する理解を増すにつれ、ここに ù のみを用いることにこだわる必要がなくなった。

- ・後期キリシタン版では、大方 ù で付されるが û も付される。ただし、û は前接する文字が縦に長い文字の際に選ばれやすい。これは音韻論的対立がないための誤読の回避で、この環境下で û を用いることが可読性を向上させたケースもある。

今回、印刷に注視して、ウ段長音の表記変遷を捉え直した。今後の課題として、印刷の過程をさらに詳細に検討しなければならない。活字の制約、印刷の行程など、当時の印刷状況を踏まえることで、当時の表記の実像について見えてくるものがあるだろう。キリシタン文献を扱った研究は、日本語史研究のためにわずかばかり利用する研究を脱し、文献としての全貌の把握が必須となっている。今回の考察が、その一助になればと願う。

注

- (注 1) 『日葡辞書』は森田 (1993) のデータを集計して利用した。また、このデータには、巻末に付される「ことばのやわらげ」の使用例については計上していない。
- (注 2) 富永 (1978) で、アセント符号と文字は一括したものと指摘されている。また、2019 年に筆者がベルギー、プランタン＝モレットゥス印刷博物館で行った調査で、16 世紀にアセント符号と文字が一括されたものが使用されていることを確認した。本稿では、この一括されたものであったという立場にとりあえず立ち、論考を進める。また、û は前期キリシタン版では確認できない。これは ù が後期キリシタン版作成時に作られた可能性も有する。
- (注 3) 千葉 (2022) では、ウ段長音を示す例として、û が 94 例、Û が 36 例であることを示す。「バレット写本」では、ウ段長音対応箇所 ù が主として用いられている。
- (注 4) この写本以外で日本語ローマ字写本としてまとまりを持つものが確認されておらず、写本の書写状況は広く論じることができない。今後その他書簡での日本語ローマ字表記を確認することで当時の書写状況がより明確となる。今後の課題である。
- (注 5) しかし、実際は『日本小文典』内でも、ウ段長音表記は û が 308 例、Û が 33 例と併用されており、このロドリゲスの解釈が『日本小文典』内すべてで適用されてはいない。本稿の論旨を踏まえた際に、ロドリゲスが自筆で ù を用いていたのか、それとも û を用いたのかの判断は行いがたい。この点でロドリゲスの自筆原稿に目向け彼の書写傾向を探る

必要がある。これはアジュダ文庫（リスボン）所蔵の『日本教会史』の自筆原稿の精査で判明する部分もあるだろう。今後の課題である。

(注6) アルファベットの大字は今回の調査では除き、小文字だけをカウントした。

(注7) A折（表紙-14）には銅版画が含まれており、Cc折（399-巻末）にも目録が入っているため、この2折は本文が他折よりも少なくなっている。よって、この2折については今回の調査対象から除外した。

(注8) 『ヒイデスの導師』では折ごとの活字使用数の調査していないが、『天草版平家物語』以上に利用されているといった印象はない。また、前期作品では、『天草版平家物語』が25行から、『サントスのご作業』『ヒイデスの導師』が24行から成るため、前者の方が1行分だけ活字の使用数は多くなる。

(注9) 参考までに、オ段長音対応箇所を有するのはj折の438箇所である（内訳は、öが262、ôが176）。

(注10) 後期キリシタン版の本文で使用されるローマ字の活字が、欧州から持ち込まれたものを利用したのか、日本で作ったものを利用したのかを、現時点で判別できていない。豊島（2013）などで指摘される漢字の活字の鋳造などは、変化を確認できるが、ローマ字についてはより精査が求められる。これは今後の課題である。

(注11) 版誕生後も、写本で長音表記が揺れる例はある。『天草版平家物語』に付随する手書きの語彙集「難語句解」は、マヌエル・バレット神父によって記されたものだが、『天草版平家物語』内で付されている ü, ö を ú, ó と書き換えている例が散見する。こういった例からも、手書きにおいては長音表記が版本のように統一されていなかったことが伺われる。

(注12) ここまでで確認したがそもそも写本・前期キリシタン版で û はほぼ用いられない。同一環境では、「バレット写本」では fû が1例、iû が2例、hû が13例用いられ、また前期キリシタン版でも『サントスのご作業』で fû が39例、iû が200例、hû が187例、『ヒイデスの導師』で fû が26例、iû が145例、hû が82例、『天草版平家物語』で fû が7例、iû が102例、hû が217例用いられ、ウ段長音は ˘ と対応させていた。これに後期キリシタン版では û が用いられるところからも、版面担当者がこの併用という対応を選択した可能性が高い。

参考文献

- 千葉軒士 (2008) 「キリシタン・ローマ字文献におけるsとその異体字について」『名古屋言語研究』第2号
- 千葉軒士 (2009) 「キリシタン・ローマ字文献のウ段長音の表記について」『名古屋大学国語国文学』102
- 千葉軒士 (2022) 「「バレット写本」におけるアセント符号について ―長音に対応するアセント符号の諸相―」『中部日本・日本語学研究論集』和泉書院
- 富永牧太 (1978) 『きりしたん版文字攷』富永牧太先生論文集刊行会
- 豊島正之 (2010) 「前期キリシタン版の漢字活字に就て」『国語と国文学』87
- 豊島正之 (2013) 「日本の印刷史から見たキリシタン版の特徴」『キリシタンと出版』八木書店
- 中野遙 (2020) 「「キリシタン版『日葡辞書』に見るキリシタン版ローマ字活字について」『上智大学国文学論集』53
- 丸山徹 (1988) 「キリシタン資料「開合表記」成立の背景」『南山国文論集』第十二号
- 森田武 (1976) 『天草版平家物語難語句解の研究』清文堂出版
- 森田武 (1977) 「音韻の変遷(3)」『岩波講座日本語5 音韻』岩波書店
- 森田武 (1993) 『日葡辞書提要』清文堂出版

【付記】 本研究は2021年度科学研究費助成事業（基盤研究（C））「宣教師によるキリシタン・ローマ字文献の表記法の実態解明」（21K00612）による研究成果の一部である。

（ちば・たかし／中部大学准教授）

受贈誌 (二〇二二年九月～二〇二二年八月)

- 国文学研究(早稲田大) 一九五、一九六
国文学研究ノート(神戸大) 六一
国文学攷(広島大) 二五〇～二五二
国文学論考(都留文科大) 五六～五八
国文学論叢(龍谷大) 六七
国文白百合 五二、五三
国文橘 四七
国文鶴見 五六
国文目白 六一
国文論叢(神戸大) 五七～五九
古代研究 五五
古代文学研究第二次 三〇
語文(大阪大学) 一一六・一一七(合併号)、一一八
語文研究(九州大) 一三二、一三三
語文と教育(鳴門教育大) 三五
語文論叢(千葉大) 三七
実践国文学 一〇〇、一〇一
繡 三四
就実表現文化 一六
尚綱語文 一一

上智大学国文学科紀要 三九

上智大学国文学論集 五五

湘南文学(東海大) 五六、五七

昭和女子大学大学院日本文学紀要 三三

叙説 四九

白百合女子大学研究紀要 五七

詞林 七〇、七一

神女大國文 三三

人文学報 五一七―一、五一八―七、一一

鈴屋学会報 三八

成蹊国文 五五

成城国文学 三八

清心語文 二三

全国文学館協議会紀要 一五

専修国文 一〇九、一一〇

高岡市万葉歴史館紀要 三二

滝川国文 三八

玉藻 五六

近松研究所紀要 三〇

中央大学国文 六五

帝京日本文化論集 二七

東京大学国文学論集 一七